

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	三島由紀夫「獅子」におけるアイゲウス
Author(s)	佐藤, りえこ
Citation	プロピレア , 26 : 84 - 84
Issue Date	2020-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050166
Right	Copyright (c) 2020 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



三島由紀夫「獅子」におけるアイゲウス

佐藤 りえこ

エウリピデスの悲劇『メデシア』を翻案した作品のひとつに三島由紀夫の短編小説「獅子」(1948年同人誌『序曲』創刊号に発表)がある。メデシア伝承を素材にしたギリシア悲劇(紀元前431年に上演)は、舞台を戦後間もない日本に移し、夫に裏切られた女主人公が、夫の浮気相手とその父、わが子を殺害し夫に復讐するという小説に改作された。作品の副題「エウリピデスの悲劇『メーデア(原文のママ)』に拠る」から三島は原作に忠実であろうとした。その一端をアテナイの王アイゲウスの登場場面に見ることができる。原作でこの場面は、「全く必要のない不合理な要素」(アリストテレス『詩学』)だと見なされ、セネカのようにこのシーンを削除した作品(悲劇『メデア』)がある一方で、アイゲウスの来訪によりメデシアが復讐を実行に移す機会を掴む重要な場面だと評されている。三島はアメリカ人の少佐アイゲウスを作品に登場させている。

原作でメデシアはアイゲウスに身の安全を保障してもらう代わりに、魔術で王の世継ぎを誕生させるという取り決めをする。これに対して「獅子」の繁子(=メデシア)とアイゲウス少佐は「幸福」について世間とは違う認識を共有する。二人は戦前の価値観や倫理観が覆され安寧な暮らしが希求される風潮を否定し、巷の「幸福の思考」を拒む。そしてアイゲウスは「稲穂を焼く夏の太陽」が秋日に穏やかになるように、懊悩から解放され平安が訪れると繁子を慰藉する。しかし繁子にとって不幸の中で苦悩することは「みのりの多い人生のための機縁」でも「宗教生活に入るための機縁」でもなく「生きることの証し」そのものであるため、アイゲウスの言葉は同情から発せられる慰めで、繁子の翻意を促す力はない。二人の幸福についての認識に齟齬をきたしていることが明白になる。アイゲウス少佐は繁子の唯一の理解者だったが、わが子と自らの命で「一つの確実な不幸=復讐」を贖おうとする繁子の「乱心」は容認できないという点において、彼女の特異性を際立たせる役割を担っていると言える。